

メアリー・シェリーの *Frankenstein* ——グレイディッド・リーダーの解釈——

横山 孝一*

(2015年11月26日受理)

はじめに

メアリー・シェリーが書いたホラー小説の古典『フランケンシュタイン』 *Frankenstein; or The Modern Prometheus* (1818年、改訂第3版1831年)は、英語学習者向けにリライトされたグレイディッド・リーダーでも楽しむことができる。本稿では、コンパス・クラシック・リーダーズ、ペンギン・アクティヴ・リーディング、オックスフォード・ブックワームズ、マクミラン・リーダーズの計4つの版を紹介する。原作の初版は1818年に出たが、改訂第3版は、エリザベスを父の亡き妹の娘から母が旅先で見つけた孤児に変え、母親共々献身的な女性に変更した。マクミランは初版、それ以外は第3版を下敷きにしている。それぞれの特色と章ごとの展開は「付録」のあらすじにまとめた。本論では、8つの項目に分けて各版を比較してみた。同じレベル(/ステージ)3に分類されているものの、英文や取り上げ方にさまざまな違いが見られる。原作をまとめる際の解釈の違いは、難解な問題作を読み解く上で参考になるだろう。

原作にもっとも忠実なのはコンパス版で、原作からもっとも離れているのはマクミラン版だとわかったが、これは出版社の方針ではなく、あくまでリライトした著者の好みだ。姉妹編となる拙論「*The Secret Garden*—グレイディッド・リーダーの作り方」『群馬高専レビュー』第33号を参照していただきたい。

1. 出だし

メアリー・シェリーの『フランケンシュタイン』は、北極点をめざすロバート・ウォルトン隊長が姉に宛てた手紙の形をとっている。本稿で取り上げるグレイディッド・リーダー中、もっとも原作の雰囲気に近い出だしは、コンパス版だ。

Mrs. Saville, England

St. Petersburg, Dec. 11th, 17—

My dear Margaret,

I arrived here yesterday, and everything is going to plan. All is well. You need not have worried. The weather is cold, but I am enjoying it. I am also greatly looking forward to the voyage. (Compass, 5)

まずは平穏な報告から始まり、4通目の手紙でようやく *Something very strange has happened. (...)* *There was a very large man sitting on the sledge. (Compass, 7)* と怪物を目撃させる原作の展開を踏襲する。コンパス版は、愛するロシア人女性に好きな男がいると知り便宜を尽くして身を引いた船長 (the master of the ship) の挿話まで残しているほどだ。

ペンギン版はもう少し急ぐ。

My dear sister Margaret

I am writing to you from my ship. We have travelled a long way, and we are now in the far north. (Penguin, 1)

と始め、同じ手紙の次の段落で、*I have something interesting to tell you. A few days ago, we found a man in the sea. He was travelling across the ice, but his dogs died. He was alone. We were hundreds of miles from land, so we were very surprised. (Penguin, 1)* と、フランケンシュタインを登場させ、氷に閉ざされた海でいったい何をしていたのか興味を引く。

しかし、読者を物語に引き込む点では、オックスフォード版のほうが上だ。

'Captain! Something is moving on the ice. Look over there!' (...)

He put his telescope to his eye, and through it he could see the shapes of ten dogs pulling a sledge over the ice. He could also see the

driver of the sledge—a huge figure, much bigger than a man. (Oxford, 1)

原作とコンパス版が第4の手紙でようやく描いた核心の場面から始まっており、読者は冒頭から、犬橇を操る怪物に注目することになる。が、そのため、姉のマーガレット・サヴィル夫人に手紙を書く設定は放棄されている。乗船したフランケンシュタインが手記を書いたウォルトン隊長に読んで聞かせ、最後に一般読者に向けて隊長が注釈をつける形に変更されている。その結果、姉の待つ故郷イングランドへの思いは感じられない。

だがこのオックスフォード版の変更は、マクミラン版ほど大胆なものではない。なにしろマクミラン版は、手紙どころかロバート・ウォルトン隊長すら省略している。極寒の地で怪物を追跡するフランケンシュタインが自ら手書きのメモで読者に向けて語りはじめるのだ。

I am the most unhappy man in the world. I have followed the Monster to this place of ice and snow. I know he is near. I must find him. I gave the Monster life, but now I must kill him. Then I will kill myself—I will die alone in this terrible place. (Macmillan, 8)

なぜ彼は「世界でいちばん不幸な男」になったのだろうか。なぜ「モンスターに命を与えた」のか、「殺さねばならない」事情とはどういうものなのか。読者の関心を引きつけるという点では、この出だしもなかなか魅力的だ。しかし、原作を知る者は「自殺する」という決意に違和感を持つにちがいない。死を看取るウォルトン隊長を省いて、語り手をフランケンシュタインだけにしてしまった結果、自分で自分の死とそのあとのことは語れないので、必然的に原作とはまるで異なる結末となる。

2. エリザベス

フランケンシュタインが造る怪物は、生まれてすぐ創造主に見捨てられ、何よりも愛する女性を欲し、その願いが叶わないことに怒りを爆発させる。対してフランケンシュタインは、両親の愛に恵まれ、生まれてすぐ妻となるエリザベス・ラヴェンツァを文字どおり与えられていた。娘を欲しがらる母親が、コモ湖近くの貧しい家で5人の子の中に金髪で青い目のかわいい女の子を見つけ、孤児と聞いて養女にした。My mother said, “I am giving you Elizabeth as a present, Victor.” (Compass, 13)とコンパス版は第3版の原作に忠実だ。I grew to love her, and I knew that I would love her until I died. I believed that she was mine and

only mine. (Compass, 13)という非常に恵まれた環境は、怪物の悲惨な境遇と際立った対照をなす。フランケンシュタインの幸福な家庭を強調するためなのか、コンパス版では、重要な母の死がカットされている。

ペンギン版ではエリザベスを養女にした経緯と共に、母の死の場面がきちんと描かれている。メアリー・シェリーが第3版で加筆したとおり、「重い病気」（原作では猩紅熱）にかかったエリザベスを日夜看病して死の危険から救ったのち、自分が病気になって亡くなる。二人を呼んで遺言するところが重要だ。

‘Children,’ she said, ‘I am putting all my hopes in the two of you. I want you to marry. I believe that your marriage will bring you future happiness.’ (Penguin, 6)

エリザベスはこの後に母代りも務め、母親すらいらない怪物の孤独がさらに際立つのだ。オックスフォード版では、地名などを省いて、より簡潔に「私のために妹を見つけた」いきさつを語り、As I grew older, my love for Elizabeth became stronger all the time. (Oxford, 4)と自然に愛情が育っていく。母の死は人生初の不幸な出来事として回想されるが、なぜかオックスフォード版ではエリザベスの病気に感染する設定を変更し、単独で重病になった母が、‘My children, I am very happy because you love each other, and because one day you will get married.’ (Oxford, 6)と語ったことにしている。現代風に当事者の意思を尊重しているのだろうか。原作の母親の要望が薄れてしまっている。

‘My children,’ she said, ‘I hope that one day you will marry.’ (Macmillan, 9)とマクミラン版の母親は希望を述べているが、「12歳のとき弟のウィリアムが生まれ、2年後、いとしいエリザベスが一緒に暮らすようになった。父の親友の娘で両親を亡くしたのだった」I loved her from that time. (Macmillan, 9)と、5歳ではなく14歳のときに家にやって来たことにしている。思春期で恋に落ちやすくなったが、出だし同様、マクミラン版の変更は大胆だ。

3. フランケンシュタインの関心と勉強

創造主となるフランケンシュタインはどんな関心を抱き、何を勉強してきたのか。コンパス版はここでも原作にいちばん忠実で、他の版が省略したコルネリウス・アグリッパ、パラケルスス、アルベルトゥス・マグヌスの名をあげて、中世の怪しげな錬金術師の本に熱を上げた少年時代を描いている。これらの本は結局役に立たないのだが、原作では、生命の秘密を手に入れるための熱意

の原点になっている。が、I was also very interested in ghosts and devils. (Compass, 14)は蛇足だ。

I wanted to know the secrets of life, and, most of all, I wanted to know how to make living things. I read all the books that I could find. (Oxford, 6)と、オックスフォード版は読んだ本を曖昧にしたが、最大の関心が生命の創造であることをはっきり述べている。ペンギン版では、I read a lot of books on science. The most interesting subject to me was chemistry. I was interested in the secrets of the sky and the earth, of the natural world. (Penguin, 4)と、より現実的な科学者のたまごであったことを印象づける。原作との違いが目立つマクミラン版では、I was always interested in science. I wanted to learn about human life. I wanted to learn more in order to help people. I wanted to make their lives better. (Macmillan, 9)と、自分の個人的関心よりも、人々を助けるためという公共の目的が強調されている。なるほど『フランケンシュタイン』は今日、人類のためと称して研究に邁進する科学者にも不審の目を向けさせる書物になっている。

15歳の時に落雷を見た体験はマクミラン版を除く3冊がそろって取り上げている。ここでは、ペンギン版がもっとも原作に近い。As I stood by the door, I suddenly saw a stream of fire pour from an old and beautiful tree. It was about 60 feet from our house. When the lightning disappeared, only the bottom of the tree was left. The tree was completely destroyed. (Penguin, 5) この体験こそが、怪物創造の鍵となるのである。映画でおなじみになっている怪物に命を吹き込む場面は、グレイディッド・リーダーではどのように描かれているのだろうか。

コンパス版では、雷の威力を見てから電気の勉強を始め、大学ではヴァルトマン教授の指導のもと化学と電気を研究し、日夜死体を調べ、生命の秘密を発見する。しかし、I know that you want me to share this secret with you, but I'm afraid that if I do so, it will make you unhappy. (Compass, 15)と言って、手順はあえて語らず、It was one o'clock in the morning when I at last succeeded in creating life. (Compass, 16)と、怪物の完成を簡単に述べている。

ペンギン版でも、落雷から電気に関心を持ち、an excellent teacher のヴァルトマン先生に学び、生命が死にいたる人体の変化の過程を研究。病院から死体のパーツを持ち帰って人造人間を完成するが、

One cold night in November, I saw the first

result of my hard work. The body of the man in front of me had no life in it. It was one o'clock in the morning, and rain was falling outside. Nervously, I used my tools to create life inside the body. Then I saw his yellow eyes open. (Penguin, 10)

と、生命を送り込む器具については曖昧だ。

おそらく読者はオックスフォード版の語りにいちばん満足するのではないか。世界的な科学者ヴァルトマン教授に激励され、病院と大学で臨終の人体をひたすら研究。Suddenly I was sure that I knew the secret of life. I knew that I could put life into a body that was not alive. (Oxford, 8-9)と悟る。大学が提供した住居兼実験室に150メートルのマストを立てて、落雷の電気を実験室の機械に送るようにした。There had been so much power in the electricity of that lightning. I believed I could use that electricity to give life to things that were dead. (Oxford, 9)と、マストに雷が落ちるのを待ち、機械からワイヤで体に電気を送る。The secret of my machine must die with me. (Oxford, 9)と機械の構造については語ることを拒否しているが、落雷を利用する場面は映画的で迫力がある。

マクミラン版はどうか。原作のインゴルシュタット大学を勝手にハイデルベルクに変え、ヴァルトマン教授も登場させないが、生命の秘密を発見しようと奮闘するのは同じだ。墓から死体を盗ませて実験室で切り刻み、血や脳も調べる。ひどい嵐の夜、Suddenly the lightning gave me an idea. (Macmillan, 14)と、遅ればせながら落雷がヒントになる。病院と墓地から集めたパーツをつなぎ合わせ、落雷を待つ。

The lightning hit the wires on the roof. The sparks of light came down the wires. I looked at the huge body. The silver light reached the hands, the feet and the head. The body was covered with a blue and silver light. (Macmillan, 15)

ジェームズ・ホエール監督の1931年ハリウッド映画を思い出す印象的な場面は、そっけないコンパス版より、はるかにおもしろい。ところがである。肝心の原作に、命を生み出す過程は描かれていない。

It was on a dreary night of November, that I beheld the accomplishment of my toils. With an anxiety that almost amounted to agony, I

collected the instruments of life around me, that I might infuse a spark of being into the lifeless thing that lay at my feet. It was already one in the morning; the rain pattered dismally against the panes, and my candle was nearly burnt out, when, by the glimmer of the half-extinguished light, I saw the dull yellow eye of the creature open; it breathed hard, and a convulsive motion agitated its limbs.

(Shelley, 60 以下頁数のみ記す)

ペンギン版とほぼ対応する。物足りないと感じるコンパス版も、原作に基づいていたのだ。しかし、常に原作に忠実だと、現代の読者は満足しない場合もある。原作から離れすぎるのは当然問題だが、部分的に改善するのは、グレイディッド・リーダーの特権なのかもしれない。

4. ウィリアムの死

フランケンシュタインは生命を誕生させたものの、恐ろしい怪物を造ってしまったと感じ、逃げ出してしまふ。弟のウィリアムが殺され、怪物の仕業と直感するが、使用人のジュスティーンが裁判にかけられて犯人として死刑になる。各版によって、主人公の態度に違いが見られる。

コンパス版では、フランケンシュタインは自責の念から自殺したくなるが、エリザベスが慰める。オックスフォード版は、判事の家に行つて怪物の話をしたが、信じてもらえない。老いた父と家族を守るため、自殺を思いとどまる。ペンギン版は、死刑の判決が出て I felt very unhappy. (Penguin, 22) と責任を感じるが、自殺は考えない。むしろ、怪物を殺したいと思う。マクミラン版は、ジュスティーンの名前を省略し、エリザベスも使用人が犯人と信じている。この版はまたも原作を逸脱し、死刑を止めに馬を走らせるが、一足違いで執行されてしまう劇的な場面を創り出している。こうした改変がどこまで認められるかは賛否の分かれるところだろう。いずれにせよ責任を感じ、自分も murderer だと思つて涙を流すが、自殺は考えず、自分の秘密を家族から隠そうと腐心する。原作では「言葉では表せない地獄のような激しい責め苦」(86 小林章夫訳)を感じ、湖に身を投げたくなるが、エリザベスの存在に救われる。コンパス版が的確にまとめているといえよう。

5. 怪物の言語習得

怪物はフランケンシュタインの前に姿を現わし、ウィリアムを殺害してジュスティーンのせいにした理由を語る。聞き手を感動させるほど雄弁な語りは苦悩に満ちた

体験に基づいているが、言葉自体はどのようにして獲得したのだろうか。

やはりコンパス版がいちばん原作に近い。トルコ人商人を監獄から救出してフランス政府から迫害されたド・ラセー家と、愛を貫くため長男のフェリックスの元へ来たトルコ人の娘サフィーをきちんと描いている。フェリックスと妹のアガサが自分たちの言葉をサフィーに教えるのを怪物が利用。さらに森の中で本を見つけ、読書で人間の歴史や神について知る。この学習によって初めて自分の悲惨な境遇を認識し、フランケンシュタインの名前を知つて、復讐を思いつくことができたのだ。

オックスフォード版は、父親、フェリックス、アガサの3大家族を隣接する小屋から観察し、会話を聞いて言葉を学ぶ。サフィーを英語圏でなじみのあるソフィーに名前を変えてしまっているが、この外国人の恋人にフェリックスが世界史の本で言葉を教えるのを密かに利用。キリストや、アメリカの原住民の悲劇など宗教や人間の争いについて学んでいるのは原作どおりだ。

ペンギン版はサフィーを登場させず、ド・ラセー家の3人を観察して言語を習得し、留守中、家に忍びこんで自ら本を読んで知識を得たことにしている。原作では森で見つけたカバンの中の本を読むので、控えめな態度と矛盾する。なお、原作からいちばん遠いマクミラン版では、ド・ラセー家の人々に名前を与えていない。盲目の老人に若い娘が本を読んでいるのを聞いて言葉を学び、この盲人と友人になって知識を得たことにしている。

6. 怪物の唯一の希望と復讐の誓い

原作ではド・ラセー家から愛と親切も学び、自分もその一員になりたいと願う。己の醜い姿を認識しているため、まずは盲目の老人に助けを求めるが、帰宅したフェリックスに棒で殴りかかられる。家族は去り、怪物は無人の家に火を放つ。コンパス版はそのとおりにしている。オックスフォード版もほぼ同じだが、一家が去った後に、家を燃やす場面はない。ペンギン版はサフィーを省いたので帰ってくるのはフェリックスとアガサの二人だけだが、空き家の周りで踊り狂って放火する原作の描写を採用し、迫力がある。ここでも驚かされるのは、マクミラン版だ。怪物は盲目の老人と意気投合して会話を楽しんでいる。ある日、帰ってきた娘に見つかり、その兄に銃で撃たれる。負傷して逃げたまま戻らないので、家を焼く暇はない。

コンパス版とオックスフォード版では、このあと、原作どおり、川に落ちた女の子を助け、父親に銃で撃たれ負傷する場面がある。マクミラン版はペンギン版と共にその場面を省略しているため、フェリックスが棒で殴る代わりに銃撃するのは2つの場面を1つにまとめた

見なすことができる。しかし、ウィリアムを殺す前に、まだ善を行なうことができた重要な場面なのだ。善意を人間に理解してもらえず敵意で迎えられたために、陰惨な復讐に向かう。安易な省略は、原作のきめ細かい展開をわかりにくくする。

怪物は自分の相棒に育てようと考えたウィリアムに拒まれる。コンパス版は不覚にも省いてしまったが、絞め殺したのは、フランケンシュタインの名を聞いて逆上したからだ。無実のジュスティーンに罪をかぶせながらも、創造主フランケンシュタインに愛憎を抱き、説得できると思っている。だから、伴侶を造るよう頼むのである。

“It is you who are in the wrong,” he said. “I do bad things because I am so unhappy. If I cannot have someone to love me, then I will make everyone afraid of me. Why can’t you understand this? Give me a female to love and be loved by me, and I shall be happy. I shall not kill again.” (Compass, 42) と、コンパス版では、怪物の孤独と創造主の無理解という問題の核心を怪物の言葉で伝えている。‘I am alone and miserable.’ と、つらい立場を切実に訴えるオックスフォード版では、‘Only someone as ugly as I am could love me. You must make another creature like me, a woman monster to be my wife.’ (Oxford, 33) とつづけて、原作のグロテスクな要求をなぞり、‘Be kind to me now, and I will learn to love and be kind.’ (Oxford, 33) と要所をつかんでいる。

ペンギン版はコンパス版とほぼ同じ所をまとめている。‘You are wrong,’ answered the monster. ‘And I will explain. I am bad because I am unhappy. I am hated by everyone. There is no reason for me to like humans. They do not like me. If I cannot have love, I will create fear. I will take revenge on my enemy—you, Frankenstein.’ (Penguin, 38) と、脅しながら愛を求める。マクミラン版は単純ながらも、‘I have brought unhappiness because I am unhappy,’ the Monster replied. ‘Now only you can help me. Only you can make my life happy.’ (Macmillan, 32) と、要点を押さえている。創造主フランケンシュタインが怪物の幸せの鍵を握っているのだ。

しかし、ここで幸せになってしまっただけでは恐怖小説にならない。コンパス版のフランケンシュタインは、怪物の伴侶となる女を完成する直前に、彼女が怪物を嫌う可能性があることに気づく。オックスフォード版は、女の怪物はもっと邪悪な殺人者になるかも、二人は憎み合うかも、人間を殺しつつけるかも、と悩む。原作どおりの心配に加え、ペンギン版では、南米のジャングル行きを彼女が拒んだら、もっとハンサムな男を彼女が好きにな

ってしまったら怪物はどうなるかと考え、女の怪物を完成前に破壊する。原作にある子供の心配をしているのは、マクミラン版だ。‘What if they have children? One day these terrible creatures may rule the world.’ (Macmillan, 38) ただし、これを親友のヘンリーに言わせているのが、いかにもマクミランらしい。原作では、約束を破り妻を破壊したことに怒った怪物が、ヘンリーを暗殺し、フランケンシュタインが容疑者として逮捕される一幕がある。グレイディッド・リーダー3冊が程度の差はあれ忠実にまとめているが、マクミラン版のヘンリーは、フランケンシュタインの目前で即座に殺されてしまう。怪物との約束よりも、人類と社会に対する科学者の責任を優先することにした原作の主人公の決意がこれでは感じられず、怪物の殺人も衝動的で、復讐の陰湿さが弱まってしまった。

7. エリザベスの死

最後の希望を文字どおり打ち砕かれた怪物の捨て台詞は有名だ。shall を will に、be を return に書きかえている版もあるが、グレイディッド・リーダーは4冊とも以下のように取り入れている。

“I will go now, but I shall be with you on your wedding night.” (Compass, 47)

‘You will be sorry that you were ever born. Remember this: I shall be with you on your wedding night.’ (Oxford, 37)

‘I will leave. But remember this: I will be with you on your wedding night.’ (Penguin, 49)

‘I will return on your wedding-night, Victor Frankenstein. I will have my revenge.’ (Macmillan, 40)

この予告どおり婚礼の夜に怪物は参上し、創造主の新妻エリザベスを絞め殺す。すでに見たように子供時代を同じ家で暮らしてきた最愛の女性である。怪物が犯した殺人でもっとも痛ましく、怪物の邪悪さを感じずにはいられない場面だが、フランケンシュタインには彼を熱愛する女性がいたという事実が、孤独な怪物のみじめさを今一度思い起こさせる。

エリザベスはヴィクターを熱愛し、その幸福を何よりも願っていた。‘My love for you is such that I want you to be happy more than anything.’ (Compass, 54) と、コンパス版では献身的な愛の言葉を手紙に記している。ペンギン版では、ヴィクターにもっと好きな人がいれば喜んで身を引く、‘If you are happy, I will not be lonely or sad.’ (Penguin, 57) とまで書いてい

る。オックスフォード版では、再会したときの様子を、*She, too, was thinner because she had worried about me so much. But her gentleness and her love made her as beautiful as ever.* (Oxford, 44)と語る。彼女は、亡くなったフランケンシュタインの母のように心配し、愛を捧げている。マクミラン版のみ原作と違い、手紙ではなく直接フランケンシュタインに‘If you love me, Victor, I will marry you. I will make you happy.’ (Macmillan, 43)と告げる。最後の「あなたを幸せにします」という言葉は、エリザベスの役割を要約している。これほど愛に満ちた美しい女性に幸せを約束されていたヴィクター・フランケンシュタインに対して、怪物は、醜い妻すら手に入れることができない。この幸福と不幸の際立った対比は、『フランケンシュタイン』を読み解く鍵になっているように思われる。

8. フランケンシュタインの復讐

物語はここに来て、怪物の復讐からフランケンシュタインの復讐に切り替わる。ジュネーヴを去る前、犠牲になった家族の墓地で彼は復讐を誓う。*“By the sacred earth on which I kneel, by the shades that wander near me, by the deep and eternal grief that I feel, I swear; and by thee, O Night, and the spirits that preside over thee, to pursue the demon, who caused this misery, until he or I shall perish in mortal conflict. (...)”* (173) コンパス版は、墓地を訪れるのに肝心のせりふがない。オックスフォード版ではあっさり、*I stood there and promised them that I would stay alive until I had killed the monster.* (Oxford, 50)と要約。ペンギン版では、墓地には行かず、単に *I had to continue living to destroy the monster.* (Penguin, 67)と語る。意外にも、マクミラン版が復讐への強い思いをとらえている。天を仰ぎ、次のように神に誓う。

‘I, Victor Frankenstein, doctor of Geneva, say these words. I will spend the rest of my life looking for the Monster. Then I will kill him. I, Victor Frankenstein, created the Monster. I will kill him.’ (Macmillan, 49)

大地その他に誓う原作とは対照的だが、反キリスト教的な怒りの情念はよく伝わってくる。

こうして物語は冒頭に戻り、氷上の追跡場面の謎が明らかになる。コンパス版では、*You know the whole story. You know what he can and will do. He must be killed before he kills again.* (Compass, 60)とウ

ォルトンに復讐を託してフランケンシュタインは死ぬ。しかし、その死を悼みに来た怪物は *“There is nothing more for me to do,” he said. “I shall be a danger to no one in the future. Farewell.”* (Compass, 64)とあっさり去ることになる。ちぐはぐな印象を与えるが原作どおりだ。復讐に燃えるフランケンシュタインは、怪物の意図と行動を完全に見誤っていたのである。

オックスフォード版では *‘I ask you, Captain Walton, to chase the monster and kill him. (...) I want you to tell the world that the monster is a danger to everyone.’* (Oxford, 52)と的外れなことを言わせて、あっさりフランケンシュタインを死なせている。しかし、改めて怪物の理不尽な体験を総括し、*‘Do you think I enjoyed killing people? My heart was made for love, like a man’s heart.’* (Oxford, 53)とか、*‘I have done all those evil things, but am I the only person who has done wrong? I wanted love and friendship.’* (Oxford, 54)と、怪物がウォルトンに語った言葉をうまく取り入れて、対立する二つの物語について読者に深く考えさせる。

ペンギン版は *‘If I die, Walton, will you look for him? I want revenge! He will come here after I am dead. Will you promise to destroy the evil monster?’* (Penguin, 69)といった頼むものの、ウォルトン隊長が北極よりも隊員たちの人命を重視してイングラッドへ帰ることを決めると、ここにとどまると言い張ったが、結局は *‘I am afraid that he will kill more people. But I cannot ask you to stay here, in the cold ice, and look for him. Goodbye, Walton. Do not try to find the secret of life! I failed...but perhaps another man will succeed.’* (Penguin, 70)と言って死ぬ。フランケンシュタインの死の経緯を語り、最後の言葉を記しているのはペンギン版だけだ。しかし、復讐を終えて死を覚悟している怪物に、*‘I must go and die in the ice, as far away as possible.’* (Penguin, 71)と言わせているのは欠陥ではないか。原作では「氷」ではなく「火」で死ぬのだ。

Frankenstein; or the Modern Prometheus が原題である。天上の火を盗んで人間に与えて罰せられた「プロメテウス」は科学者のフランケンシュタインをさすのだろうが、原作で火のモチーフは怪物についても用いられていた。フランケンシュタインの前に初めて姿を現わしたとき、怪物は小屋に招き、火にあたって話をする。マクミラン版には誕生後いきなり実験室が火事になり、火から身を守るためにフランケンシュタインの上着を持って出る場面があるが、これは原作になく、やりすぎだ。生まれてから火を知り、使いこなして寒さをしのぐコン

パス版、食料目当てに他人の家に入って火にあたり、ド・ラセー家で真っ先に「火」という言葉を知るオックスフォード版が適切だ。ペンギン版では、ド・ラセー家で学ぶ言葉の中に「火」はない(30)。著者が重要視していなかったのだ。

怪物が死を覚悟して去る最後の場面は、オックスフォード版がもっとも原作の意図を汲み取っている。北に行き行って死ぬと怪物は語る。

‘I shall build a great fire, and lie down on it to die. I shall welcome the pain of fire, because it will help me to forget the pain in my heart. I have felt more pain than Frankenstein. And when the fire has died down, I shall be at peace.’ (Oxford, 54)

これまで寒さを暖めてくれた火によって死ぬのである。恐ろしい痛みをともなうが、最後には平安をもたらしてくれる。怪物は、船室の窓から外の小舟に移り、暗闇に消える。コンパス版では *a large piece of ice* (Compass, 64)、ペンギン版では *the cold water* (Penguin, 71) に飛び降りる。目的を果たすには *the small boat* (Oxford, 55) のほうがよかったのかもしれないが、これは原作と異なる。メアリー・シェリーは「氷の筏」*the ice-raft* (189) と書いている。

おわりに

マクミラン版はフランケンシュタインの最期を語るウォルトン隊長を省いたために、結末は原作とまったく異なる。何年も追跡して、ついに極寒の地で対決のときを迎える。銃があるので、*I will be able to kill him before he kills me.* (Macmillan, 50) と自信を持っていたが、まずは言い分を聞くよう怪物に言われる。

‘You made me,’ the Monster replied. ‘You are guilty. I did not wish to be evil. I wanted to be your friend. But you made me ugly. You ran away from me. Those I tried to love were afraid of me. So, I killed them. I asked you to create a friend for me. But you destroyed her. I had no family to love, so I destroyed yours. (...) You are guilty, Frankenstein. You gave me this ugly body. You created me, you are a wicked man.’

(Macmillan, 50-51)

驚くことに、マクミラン版のフランケンシュタインは、

非難をまるごと受け入れる。‘What you say is true,’ I cried. ‘I was the murderer of those I loved!’ (Macmillan, 51) 復讐を忘れ、すっかり反省してしまう。怪物が許しを乞う原作とはあべこべだ。そして怪物は？

‘Now you have said these words my life of misery and unhappiness is complete,’ said the Monster sadly. ‘You are the guilty one, not me. Now I shall go far away from here. (...)’ (Macmillan, 51)

フランケンシュタインが罪を認めたことに満足する。「火を焚いてその中に身を投げて死ぬつもりだ」と去っていくのは原作どおりだが、このふてぶてしい怪物像はメアリー・シェリーのものではない。マクミラン版は、原作にはないフランケンシュタインの短い遺書で締め括られている。

I have decided to die in this terrible place. The story of my life has ended. Perhaps no one will ever read these words. It does not matter. Here I will stay until my body is hard and cold. Goodbye—and may God forgive me. These are the last words of the unhappy Victor Frankenstein.
(Macmillan, 53)

マーガレット・ターナーがリライトしたマクミラン版は、メアリー・シェリー『フランケンシュタイン』と題したグレイディッド・リーダー中、特筆すべき異色作といえる。原作を知らずに読めば、意外に楽しめるかもしれない。しかし、原作と別物であることは読者にきちんと知らせるべきではあるまいか。

参考文献

- Mellor, Anne K. “Choosing a Text of *Frankenstein* to Teach.” J. Paul Hunter, ed. *Mary Shelley, Frankenstein: The 1818 Text, Contexts, Nineteenth-century Responses, Modern Criticism*. New York: W.W. Norton, 1996.
- Shelley, Mary. *Frankenstein* (the third edition of 1831), *Case Studies in Contemporary Criticism*. Johanna. M. Smith, ed. Boston: Bedford / St. Martin’s, 2000.
- 白田昭「異文」M・W・シェリー『フランケンシュタイン』白田昭訳、国書刊行会、1979年。
- シェリー『フランケンシュタイン』小林章夫訳、光文社古典新訳文庫、2010年。

鈴木ふさ子「二つの『フランケンシュタイン』——一八
一八年版と一八三一年版について」久守和子・中川
僚子編『もっと知りたい名作の世界⑦ フランケンシ
ュタイン』ミネルヴァ書房、2006年。

付録

1) Compass Classic Readers (2009)

Ken Methold, *Frankenstein* (Level 3)

カラーの挿絵入りで約 60 頁。物語の外枠であるウォルトン隊長の手紙を省略せずに、フランケンシュタインと怪物それぞれの語りをうまくまとめている。サフィーを登場させているところにも原作に忠実であろうとする書き手の意図が感じとれる。ただし、そのために劇的な描写が減り、全体的に平板なあらすじ調になっているので、読み物としては物足りなさを感じるかもしれない。

○ Prologue

ウォルトン隊長から姉マーガレットに宛てた 6 通の手紙。成功を夢見て北極点をめざす船旅を開始。氷に閉ざされた海で、犬橇を操る大男を目撃。追跡する疲労した男を助け、不幸な過去の物語を聞く。

① Frankenstein's Childhood

私フランケンシュタインはジュネーヴに生まれ、母がコモ湖近くの農家から引き取ったエリザベスと学友ヘンリーと幸福な子供時代を過ごした。錬金術に関心を持ち、木を木端微塵にする電気の力を知った。

② The Monster

ヴァルトマン教授に学び、研究と実験を重ね、生と死の原因を突きとめた。自ら人間創造にとりかかるが、怪物を造ってしまい、逃げだす。宿でヘンリーと再会。気絶して寝込むと看病してくれた。

③ The Murder of William

弟ウィリアムが殺されたと父から手紙が届き帰省。稲妻で犯人を見る。母親の絵を持っていたことから使用人のジュスティーンが逮捕されたと、弟アーネストから聞く。

④ The Trial

エリザベスが弁護するが、ジュスティーンは自白し、死刑となる。私は怪物の仕業と思うが、証拠はない。

⑤ The Monster Tells His Story

自殺したくなかったが、エリザベスが慰めてくれた。一人でモンブランに登ったあと怪物が出現。創造主である私に洞穴で体験を語り始める。——俺は感覚が芽生え、火の使用法を知り、寒さをしのいだ。村で人々から迫害され、ある家の裏小屋に隠れた。

⑥ The Monster Learns

俺はド・ラセー家を観察し、物に名前があることを

知った。サフィーが加わり、彼女の語学学習を利用し、人間の歴史を学び、自分には家族がないことを知る。サフィーは、フランス人一家が政府の迫害から救ったトルコ人商人の娘だった。

⑦ The Monster Tries to Make Friends

森で見つけた本で字を学ぶ。コートのポケットに入っていた手記から自分の誕生の経緯を知る。盲目のド・ラセー氏に助けを求めるが、帰宅したフェリックスに殴打され逃げだす。一家は去り、俺は家に火を放つ。川に落ちた女の子を助けると、父親に銃で撃たれ負傷。偶然出会った男の子を手なずけようとするが拒まれ（フランケンシュタインの弟とは知らぬまま）首に手をかけてしまう。

⑧ The Monster Wants a Wife

首にかけていた絵を小屋で寝ている女の服に入れた。南米のジャングルで暮らすから伴侶を造ってくれ、と怪物は頼む。私は聞き入れ、ヘンリーと英国へ行って研究し、単身、オークニー諸島に渡る。

⑨ A Promise is Broken

自問の末、製作を中断。「おまえの婚礼の夜に参上する」怪物は去る。舟が風に流され、アイルランドへ。カーウィン判事の元へ連行されヘンリーの遺体と対面し気絶。父が呼ばれ、無罪を証明して自由に。

⑩ Going Home

父とパリ滞在。自分のせいで 3 人が死んだと思い悩むが、エリザベスの手紙に慰められ結婚。美しい湖畔に宿泊。銃とナイフで怪物の襲撃に備える。

⑪ The Monster's Revenge

悲鳴。駆けつけるとベッドでエリザベスが殺されていた。怪物は湖へ飛び込む。自分を幸せにしてくれる唯一の人を失ってしまった。父もひと月後に死去。治安判事の協力は得られず、復讐を誓って追跡の旅に出たが、あなたに助けられた。奴を殺してくれ。

⑫ The Monster Returns

8月26日から9月12日までのウォルトン隊長の手紙。北極点をめざす船旅は中止し、イングランドへ帰ることに決める。フランケンシュタイン死去。怪物が船室に現われて、創造主の死を悲しみ、許しを乞う。もう二度と人に危害は加えないと誓い、海の氷の上に飛び降りて、闇に消えた。

2) Penguin Active Reading (2008)

Deborah Tempest, *Frankenstein* (Level 3)

ウォルトン隊長の手紙の最も重要な部分を冒頭と最後に据えて、原作の外枠を保持。登場人物はサフィーを省いたものの、ジュスティーンは姓まで載せ、地名も多く記す。火の重要性を見落とししたが、展開はわかりやすい。

○ The First Letter

北極をめざすロバート・ウォルトン隊長から姉マーガレット宛の手紙。衰弱している不幸な男を助け、教訓になる話を聞いて書きとめる。

① Young Frankenstein

私の名はヴィクター・フランケンシュタイン。ジュネーヴ出身だ。母がコモ湖近くの農家から引き取った孤児エリザベスが妹に、ヘンリー・クラヴァルが親友になる。両親のおかげで子供時代は幸せだった。科学に関心を持ち、15歳のとき落雷で木が破壊されるのを見て電気の力を知る。エリザベスを熱心に看病した母が、彼女にあとを頼み急死。インゴルシュタットの大学に進学し、ヴァルトマン先生から最先端の学問である化学を学ぶ。

② Frankenstein Creates Life

研究に没頭し、生命の秘密を発見。怪物を造ってしまう。エリザベスがキスのあと死体になる悪夢を見る。ベッドに来た怪物から逃げ、ホテルの外で大学生になったヘンリーと再会。怪物の幻を見て倒れる。看病されて元気を取り戻し、一緒に外国語を学ぶ。

③ William Is Dead

父から手紙で、弟ウィリアムが散策中に行方不明になり、ポケットに入れていた母の絵が原因で殺されたこと知らされる。帰省。稲妻で怪物の姿を見て犯人と直感。お手伝いのジュスティーン・モーリッツが逮捕されたこと弟アーネストから聞く。私たちは裁判で弁護したが、死刑。私は自分のせいと悩む。

④ Frankenstein Finds the Monster

シャモニーへ旅行してモンタンヴェールに登ると、怪物が出現。人間に嫌われ殺人を犯すまでの自己弁護をさせてくれと頼む。

⑤ The Monster's Story

責任を感じ、山小屋で話を聞く。——俺は、逃げ出した老人の家で朝食を食った。村人から迫害され小屋に避難。隣家の会話から言葉を学び、本から知識を得た。貧しいと知り盗みをやめ、薪を取ってきてやる。盲人のド・ラセー氏に助けを乞うが、アガサと戻ったフェリックスに殴打され、小屋へ逃げ帰る。

⑥ The Monster Wants a Wife

夜の森で泣き、人間を憎む。無人になったド・ラセー一家の周りで踊り、放火。持っていた紙から知った、自分を造ったフランケンシュタインに復讐しようと決め、ジュネーヴへ。さらって友人にしようと考えた子供が敵の名前を名のつたため絞殺。ポケットの美人の絵を小屋で寝ている女のポケットに入れて罪をかぶせた。妻として醜い怪物を造ってくれれば、南米の森に去る。——私は同意した。

⑦ Frankenstein in England

私はジュネーヴに帰り、父からエリザベスとの結婚を勧められるが、その前に約束を果たすことにする。ヘンリーと英国へ旅行し、研究。オークニーの孤島で女の怪物を造りはじめる。

⑧ Another Murder

彼女が怪物を好きになる保証はない。子供ができれば大変だ。怪物の邪悪な顔を見て、破壊した。一旦去って何時間もたって戻ってきた怪物は、責め立て「おまえの婚礼の夜に参上する」と言って姿を消す。女の残骸を海に捨てに行き、舟で寝て漂流。上陸したアイルランドで、殺人犯として逮捕されてしまう。

⑨ Frankenstein in Prison

治安判事のカーウィン氏にヘンリー・クラヴァルの遺体を見せられ、私は寝込んでしまう。その様子から犯人ではないと判断され、連絡を受けた父が駆けつける。裁判で無実が証明され、自由の身となる。

⑩ Back in Switzerland

父とスイスへ帰る途中、パリで休む。結婚を望むエリザベスの熱烈な愛の手紙を読み、「結婚しよう」と返事を書く。再会し、結婚後に秘密を話す約束。

⑪ Elizabeth

結婚式のあと新婚旅行の途中、湖畔のホテルに宿泊。嵐になる。殺されるのは自分と思い込んで銃を所持し、怪物を捜す。悲鳴が聞こえ、エリザベスが部屋のベッドで殺害されているのを見る。キスして、死んでいることを実感。邪悪な笑みを浮かべる怪物に向けて銃を撃つが、湖に飛び込んで逃げてしまう。私は史上もっとも不幸な男になった。帰宅。知らせを聞いた父は、数日後に私の腕の中で亡くなる。

⑫ The End of the Monster

気が狂ったと思われ何か月も入院したあと、警察にすべてを告白。協力を求めるが信じてもらえず、自分の手で怪物を殺そうと決心する。怪物がときどき残してゆくメッセージを頼りに、氷河を北へ北へ追跡したが、とうとう力尽きてしまった。死んだら、代わりに怪物を殺してほしい、とウォルトンに頼む。

○ The Last Letter

ウォルトン隊長は姉に後日譚を書き送る。——北極点到達よりも船員の命のほうが大切と判断し、帰国することに決めた。フランケンシュタインは残るつもりだったが、最後の言葉を残して死去。友のために泣いた。物音がして戻ると、醜い怪物が遺体に許しを乞うている。「もう悪さはしない。友もなく嫌われたから邪悪になったのだ。俺も、氷の中で死ぬつもりだ」怪物は、冷たい海に飛び込み、闇に消えた。

3) Oxford Bookworms (2008)

Patrick Nobes, *Frankenstein* (Stage 3)

出だしは、ウォルトン隊長の原作の手紙でもっとも核心的な場面から始まっている。手紙の体裁は取らず、姉への言及はない。小説全体が手紙という設定を不自然と思ったのか、乗船したフランケンシュタインが手記を書いては隊長に読んで聞かせたという形に外枠を変更している。本編はジュスティーンの死の覚悟やサフィー（ソフィーに改名）のエピソードを残すなど、原作にかなり忠実なところもある。ウォルトンはフランケンシュタインの死を看取り、船室に現われた怪物の最後の目撃者となるが、自身の北極探検については何も語らず、主人公との関係性は薄れている。

STORY INTRODUCTION

① 「隊長、何か見えます！」10匹の犬に橇を引かせる巨人。そのあとを追いかける人間。橇が壊れ衰弱している彼を、ロバート・ウォルトン隊長が助ける。ヴィクター・フランケンシュタインと名のつた男は、船で以下の手記を書き、朗読する。

VICTOR FRANKENSTEIN'S STORY

- ② ジュネーヴに生まれた私は、両親の愛に恵まれ、母が養女にした金髪のエリザベスと育ち、彼女への思いも大きくなっていった。弟たちの面倒を見るジュスティーンはみなに好かれている。学校ではヘンリー・クラヴァルと親しくなる。生命の秘密に関心を持ち、15歳のとき、木を木端微塵にした雷の電気の方に感銘を受けた。
- ③ 母が病死したのは初めての不幸だった。大学へ進学し、世界的科学者ヴァルトマン教授のもとで電気と生命を研究。死を観察し、電気ですべてに命を吹き込む機械を発明した。その構造については明かせぬ。
- ④ 落雷を待ち、身長が2.5メートルもある怪物に命を与えた。後悔し、自室に逃げ込んで眠った。ベッドのそばに来た怪物を見て、外に飛び出し、夜を明かす。駅で、大学生として故郷から出て来たヘンリーと再会。フラットに連れて行くと、怪物はいなかったが、幻を見て「助けて！」と気を失う。2か月もの間、ヘンリーが看病してくれた。
- ⑤ 父から手紙が来る。散策に出て行方不明になった弟のウィリアムが絞殺死体で発見された。首にかけていた金の鎖付きの母の絵が盗まれていた。帰省途中、現場に寄り、稲妻で怪物の姿を目撃し、犯人と確信。
- ⑥ 妹のようなジュスティーンが逮捕され、無罪を信じるわれわれの反対にもかかわらず、裁判で死刑判決が出る。私は判事に怪物の一件を告白するが、信じてもらえない。獄中でジュスティーンは死を受け入れた。みな私のせいだ。自殺しなかったのは家族を

守るためだ。出かけたアルプスに怪物が出現。「造ったものを愛せ」と山小屋で体験を語る。

THE MONSTER'S STORY

- ⑦ 実験室を出た俺は食料を探した。目と耳が機能しはじめる。逃げ出た老人の家で火に当たり、朝食を食べた。別の家では子供が悲鳴を上げ、母親が気絶。村人たちから石を投げられた。美しいきょうだい（フェリックスとアガサ）と盲人の父が暮らす家を、隣接する小屋の穴から覗いて言葉を知る。盗みはやめ、薪を届ける。水面を見て自分の醜さを痛感した。
- ⑧ トルコ人のソフィーが馬でやって来る。フェリックスが言葉を教えるのを一緒に学習。古代ギリシャ・ローマ時代、キリスト、インディアンの悲劇など、人類史を本の朗読を聞いて学んだ。一家はソフィーの父親を助けたためにフランスを追放され、フェリックスを好きになったソフィーが単身、合流したのだった。俺は盲人の父親に助けを乞うが、帰ってきた3人に見つかってしまう。フェリックスに滅多打ちにされ、抵抗せず、小屋へ逃げた。
- ⑨ 朝戻ると一家はもういなかった。実験室から持ってきた鞆の中の本から、自分を造ったのはフランケンシュタインと知り、ジュネーヴをめざす。川に落ちた女の子を助けたが、父親に銃で撃たれ、憎しみが募る。手なづけようとした男の子が悲鳴を上げ敵の名を口にしたため絞殺。首にかけていた絵を、小屋で寝ていたきれいな娘のポケットに入れた。

VICTOR FRANKENSTEIN'S STORY

- ⑩ 私は女の怪物を妻として造るよう頼まれ、同情し、家族を守るため承諾してしまう。父からエリザベスへの思いを訊かれ、帰ってから結婚すると答えた。英国で研究し、同行したヘンリーとエディンバラで別れ、住民が5人しかいない島へ。製作を準備。
- ⑪ 完成間近、自問し、怪物の顔を見て、造ったものを破壊。希望を失った怪物は「おまえの婚礼の夜に参上する」と言って去る。私は、海に女の残骸を捨てる。居眠りして嵐で舟が流され、岸につくとすぐ、カーウィン判事の元に連れて行かれる。
- ⑫ 首に指の跡があるヘンリー・クラヴァルの遺体を見せられ、私は2か月間病気で寝込んだ。父が来る。警察がアリバイの証人を見つけ自由に。パリ滞在中に、エリザベスから結婚の意思を訊くラブレターが届き、結婚を決意。帰宅後、エリザベスを抱きしめる。私を心配してやせていたが、相変わらず美しい。結婚を10日後に控え、私は銃とナイフを携帯する。
- ⑬ 結婚式の後、ハネムーンに出かけ、湖畔のホテルに宿泊。嵐になり、怪物を捜している間にエリザベスの悲鳴を聞く。部屋で絞殺されていた。邪悪な怪物

に向けて銃を撃つが、湖に飛び込んで逃げてしまう。残った父とアーネストが危ないと思い、実家に帰る。父は病床に就き、数日後に死去。私は、精神錯乱で何か月も隔離された。

- ⑭ 家族の墓で復讐を誓う。邪悪な笑い声で怪物が挑発する。ジュネーヴを永遠に去り、メッセージを残す怪物を追って北へ。犬橇で追跡し姿が見えるまで近づくが、大嵐になる。氷が砕け、橇が壊れ犬を失い、あなたの船に助けられた。奴を追って殺してくれ。

CAPTAIN WALTON'S NOTE

- ⑮ ロバート・ウォルトン隊長のノート。ヴィクター・フランケンシュタインは語り終えた数時間後に亡くなった。いつのまにかやって来たフランケンシュタインの怪物が「許してくれ」と死を悼んでいる。自己嫌悪に陥っており、火で自殺すると言って窓から外の小舟に降り、闇に消えた。

4) Macmillan Readers (2005)

Margaret Tarnner, *Frankenstein* (Level 3)

ウォルトンは登場せず、手紙の外枠はきれいに省かれ、怪物を追跡中のフランケンシュタイン (1810年生まれ) が自ら回想する体裁をとる。ジュスティーンの名前は出てこないが、彼女の死刑を止めようとする緊迫した場面を追加するなど多くの点で原作を変更。ヘンリー・クラヴァルは目の前で殺され、怪物は、醜い顔で造られたことをとりわけ恨んでいる。フランケンシュタイン自身が怪物と向き合って非を認める最後の場面まで来ると、もはやメアリー・シェリーの『フランケンシュタイン』ではない。

- 追跡中の主人公が語る。「私は世界一不幸な男だ。奴を殺してから、自殺するつもりだ」

① I Go to University

私の名はヴィクター・フランケンシュタイン。ジュネーヴ生まれだ。12歳のとき弟ウィリアムが生まれ、2年後、父の亡き親友の娘エリザベスが来た。私が18のとき亡くなった母は将来を期待。人の役に立ちたいと、ドイツのハイデルベルク大学へ進学する。

② The Secret of Life

生命の秘密を研究。稲妻を見て名案を思いつく。つなぎ合わせた人体にワイヤで落雷を送り、命を与えることに成功。しかし、開いた黄色い目を見て、怪物を造ってしまったと悔やむ。逃げだすときに火事が起こり、私は気絶した。

③ The First Death

大学生になった親友のヘンリーに看病される。一緒に言語を勉強。火事で怪物は死んだと思った。父からの手紙でウィリアムが殺されたと知り4年ぶりに

帰省。稲妻で怪物を目撃し、奴が殺したのだと知る。

④ Home Again

エリザベスと父は、首にかけていた母の絵を奪うため子守りが殺したと信じていた。私は絞首刑を止めようと馬で駆けつけるが間に合わず、自分のせいと思う。一人で登ったスイスの最高峰に怪物が現われ、「醜く造られたので邪悪になった」と語りだす。

⑤ The Monster's Story

火事から逃れたあと、男が俺を見て悲鳴を上げた。水面に映った自分の醜い顔を見て納得する。上着のポケットに入っていた本からフランケンシュタインという敵の名を知り、復讐を誓った。貧しいが愛し合って幸せに暮らす一家を観察。兄妹の留守中、盲目の老人と友人になり、この「教師」から多くの知識を得る。しかし、帰ってきた女が悲鳴を上げ、兄が銃を撃ったので、逃げた。さらって一緒に暮らそうと思った男の子も悲鳴を上げ、敵の名前を名のつたため殺し、木の下で寝ている女に罪をかぶせた。

⑥ The Monster's Request

「俺と暮らす醜い女を造ってくれ」と私は怪物から頼まれた。父からエリザベスとの結婚を勧められるが、彼女を待たせて、ヘンリーが大学の教員をしているシュトラースブルクへ向かう。

⑦ I Begin My Work

郊外で女の怪物を造りはじめるが、ヘンリーに見つかってしまう。すべてを告白すると、「子供ができたら世界を征服されるぞ」と、完成寸前の女を破壊。激怒した怪物に殺される。「よくも俺の花嫁を殺したな。おまえの婚礼の夜に戻ってくるぞ」と言って怪物はランプを蹴り、私を連れて走り去る。

⑧ My Wedding-night

うなされて目を覚ますと、父が助けに来てくれていた。ジュネーヴに帰り、まだ愛してくれているエリザベスと結婚。湖畔のホテルで悲鳴。彼女は絞殺され、怪物は林に逃げる。私は自分が殺されると思っていた。2、3週間後、父も急死。みんなの墓の前で私は復讐を誓った。「できるものなら追いかけて、俺を見つけてみる」と怪物が挑発する。

⑨ Revenge at Last

何年も追跡の末、(冒頭の)氷と雪に覆われた地で、私は怪物と対面した。「おまえが俺を造った。悪いのはおまえで、俺は悪くない」と責められ、殺人者は私自身だったと認める。すると怪物は満足し、火を焚いて自殺すると言ってあっさり去っていった。

- 私は凍死するつもりだ。私の人生の物語はこれで終わる。この手記は人目に触れなくてもかまわない。神よ、許し賜え。不幸なるフランケンシュタイン。

Mary Shelley's *Frankenstein*: Different Interpretations in Graded Readers

Koichi YOKOYAMA

This paper is a comparative study on four graded reader versions of Mary Shelley's *Frankenstein* (1818, revised 1831) in order to show how the original (all the readers except Macmillan are based on the 1831 book in which Frankenstein's mother finds and adopts Elizabeth) is changed into simplified books depending on each writer's interpretations. Eight important elements, which seem to make up the plot, are closely examined: 1) the beginning of the book, 2) Frankenstein's relationship with Elizabeth, 3) Frankenstein's interest and study, 4) the death of William, 5) the monster's language acquisition, 6) the monster's hope and despair, 7) the death of Elizabeth, and 8) Frankenstein's revenge.

On the whole Compass Classic Readers is the truest to Mary Shelley's 1831 original story, keeping Captain Walton's letters to his sister as the framework of this novel, as well as the Turkish lady Safie (Oxford changes to Sophie, and the other two ignore) whose lessons of the French language make it possible for the monster to learn how to speak and read. Although the Compass writer, Ken Method, forgets to mention the death of Frankenstein's loving mother, he manages the conflicting views of Frankenstein and the monster. Penguin Active Reading also retains the atmosphere of the original, keeping Walton's letters, which are much shortened though. Penguin is the only book which includes Frankenstein's last words. The adapter Deborah Tempest, however, apparently fails to grasp the importance of the fire motif: The monster does not learn the word "fire" at the de Lacey's and says that he will die in the ice, not flames. In Oxford Bookworms, Patrick Nobes removes the letter frame but makes use of Walton as a witness: He happens to catch a glimpse of the monster from his ship, which makes the first page most exciting among the five books including the original. Yet, Nobes misses writing about Walton's expedition to the North Pole, so Frankenstein's story does not become a lesson to him. Contrary to Mary Shelley's text, the Oxford writer describes how Frankenstein uses the electricity of lightning to create the monster, which is obviously influenced by Hollywood movies like James Whale's 1931 *Frankenstein*. This addition may satisfy the readers' curiosity since Mrs. Shelly herself did not clear the way to give life.

The most unique adaptation of *Frankenstein* (seemingly the first 1818 edition, as Frankenstein's father takes in Elizabeth) is Macmillan Readers. Margaret Turner is bold enough to omit Captain Walton and to let Frankenstein tell his own story directly to the readers of her adapted book. Accordingly the change leads to a completely different ending: Instead of Walton, Frankenstein himself meets and talks with the monster at the end; in striking contrast to Mrs. Shelly's original ending, it is Frankenstein who apologizes; after the monster leaves to kill himself, Frankenstein also decides to die in the cold. It cannot be denied that the Macmillan version has become a powerful story on its own, but it is doubtful that this graded reader deserves the name of Mary Shelley on its front cover.